

鑑別に苦慮した悪性リンパ腫の1例

◎熊谷 理絵¹⁾、津田 勉¹⁾、岡本 南¹⁾、坂口 彩有里¹⁾、龍 正樹¹⁾、太田 晴己¹⁾、吉田 雅弥¹⁾、山崎 卓¹⁾
熊本赤十字病院¹⁾

【はじめに】辺縁帯リンパ腫(MZL)は、小型～中型の異型リンパ球を主体とした低悪性度B細胞リンパ腫で、脾辺縁帯リンパ腫(SMZL)、節外性粘膜関連リンパ組織型辺縁帯リンパ腫(EMZL)、節性辺縁帯リンパ腫(NMZL)、皮膚原発辺縁帯リンパ腫(PCMZL)、小児節性辺縁帯リンパ腫(PNMZL)の5つの病型がある。今回、我々はITP治療中にMZLが示唆された症例を経験したので報告する。

【症例】脾臓摘出後の60歳代・女性。前医でITP治療中、怠薬なしの血小板低下、持続的な鼻出血を認めたため当院紹介受診となる。

【検査所見・経過】来院時検査ではPLT3.0×10⁹/Lと低値で血液像からは異常細胞は認められなかつたが、4日後の血液像に芽球様細胞が3%認められた。また、レボレートを使用していたが血小板の戻りが悪くなつたため、1週間後に骨髄検査が施行された。また、同日の血液像において、核に切れ込みのある異常リンパ球の出現を認めた。骨髄像:正形成骨髄、大きさ10～15μm、N/C比80～90%、核網粗剛で核小体は不明瞭、細胞質の好塩基性

は弱～中等度、核中心性の切れ込みを有する細胞と核・細胞質に複数の空胞を有するAb-Ly様細胞を4%認めた。FCM:CD5/19/20/23とκ陽性。血液像、骨髄像より形態学的にはFLが、FCMからはCLL、SMZLが疑われたため、リツキシマブでの治療を開始した。現在も治療中であるが、経過良好である。その後の病理免疫染色では、CD3・CD10・CyclinD1・SOX11・LEF1陰性、CD20・BCL2陽性となりFL、MCL、CLLは否定され、MZLの可能性があることが示唆された。

【考察】WHO分類第5版にはMZLはFLに類似した形態を示す場合があると記載されており、血液像と骨髄像で認めた異常リンパ球はMZLであったのではないかと推察された。

【まとめ】今回、MZLの可能性がある症例を経験した。自己免疫疾患保持者は悪性リンパ腫が背景にあることを念頭に置き検査すべきであると痛感した。また、診断するためには積極的に臨床にアプローチし、病理など他部署と連携をとることが重要である。連絡先:096-384-2111